■研究調査レビュー

小笠原諸島世界自然遺産登録 5 年を迎え，その展望と可能性

市川　英孝（鹿児島大学法文学部）

1．はじめに

日本国内に世界自然遺産登録された地は 4 か所ある。それらは屋久島，白神，知床，そして小笠原である。世界自然遺産に登録された年は屋久島と白神が 1993 年，知床が 2005 年，小笠原が 2011 年 6 月に登録が決定された。4 番目の小笠原は現在 5 年目を迎えている。

小笠原諸島は東京から南に約 1000km の位置にあり，大小 30 あまりの島々からなる北から聟島列島，父島列島，母島列島，火山(硫黄)列島，沖ノ鳥島，南鳥島，西ノ島を含む（図 1）。有人島は，父島と母島であり，小河原村観光協会 HP によると，平成 27 年 4 月現在，父島，母島の人口はそれぞれ約 2,000 人，約 450 人である。

小笠原諸島がもつ価値は，島嶼地域で，東京から離れた環境下，固有の生き物が独自の進化を成し遂げ，独特な生態系を構成していることである。植物(維管束植物)の固有種での割合は約 36%，昆虫類では 28%，陸産貝類では 94%となっている(環境省関東地方環境事務所(2014))。小笠原の世界自然遺産登録の意味は，これまでの 3 か所とは異なり，長い間孤立した環境で特異な自然環境を構成し，日本本土からのアクセスの悪さで独自文化の形成した点である。人の定住がはじまってまだ 200 年そこそこしか経過していない。この環境，生態系の保全をするためにも世界遺産登録が果たす役割は非常に大きいが，これ以前の 3 か所同様その成否は分かれるだろう。世界自然遺産が登録された地域ではもっとも新参者である小笠原が，世界自然遺産登録 5 周年を迎えるなかで，どのような効果，影響があったのか，登録時の理念を実現できているのか，本論文では明らかにする。特に登録 5 年の小笠原の事例を取り上げることは，他の世界自然遺産登録地を考察する点でも非常に有意義だと理解する。

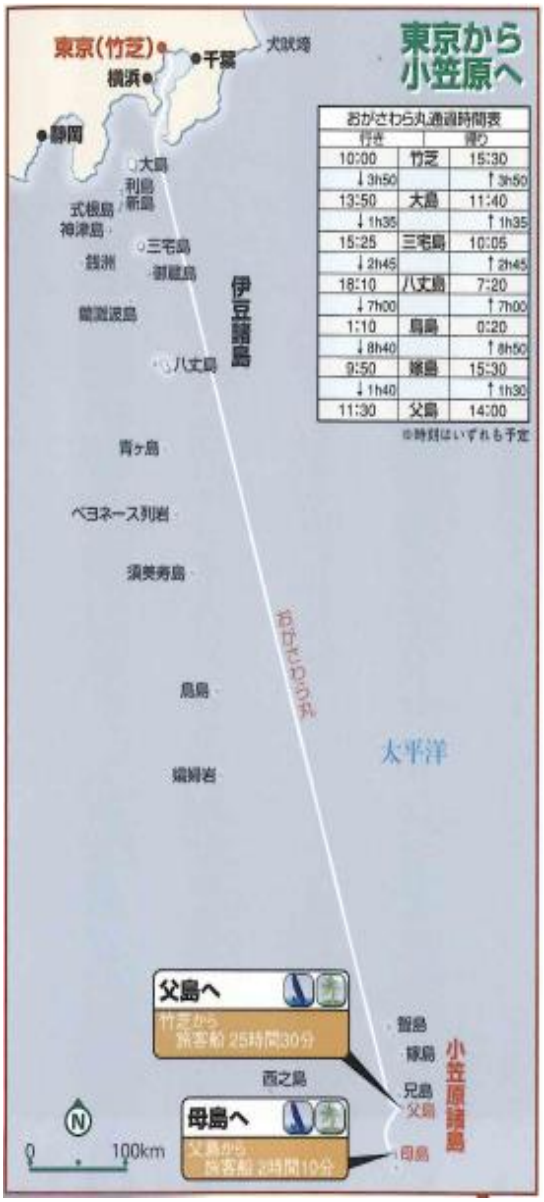

図 1 小笠原諸島図（パークガイド「小笠原」より）

２．小笠原諸島の概要

小笠原は一度も大陸と陸続きになったことがない「海洋島」である。生物は海を越えて島へ到達し，島の環境に適合したものだけが生き残り，さらに独自に進化してきた。現在人間が生活しているのは父島と母島のみである。その他の島では，これまでまったく人が定住しておらず，多くの島で手つかずの自然環境を維持している。次に大小 30 ほどある小笠原諸島の代表な島である父島と母島についての概要を説明する。

父島は小笠原諸島のなかで代表的な島であり，玄関口としてもっとも人口が多い島である。面積は 23.80 ㎢，人口は 2,026 名(平成 27 年 4 月時点)，おもな産業は漁業・農業，観光業である。アクセスは竹芝桟橋からのおがさわら丸もしくは観光船による。おがさわら丸の所要時間は 25 時間半であり，東京を 10 時に出発すると船中泊で翌日 11 時半に父島に到着する。3 泊二見港に停泊し，父島を 14 時に出港し，翌 15 時半に東京着というスケジュールである（図１）。おがさわら丸は観光客や島民などを運ぶだけでなく，生活必需品や生鮮食料品も運ぶ。おがさわら丸の入港は島民にとってのライフラインでもある。(図２)

母島は父島から南へ約 50km，面積は 20.21 ㎢，人口は 448 名(平成 27 年 4 月時点)である。おもな産業は，農業と漁業で，アクセスは父島からのははじま丸のみである。所要時間は約 2 時間，こちらも島民にとってはライフラインの役割を果たす。

小笠原観光協会 HP によると小笠原の歴史について，小笠原諸島は文禄 2 年（1593），信州深志（松本）の城主であった小笠原長時のひ孫，小笠原貞頼が発見したといわれる。しかし最初の定住者は日本人ではなく，当時欧米からたくさんやってきていた捕鯨船に，水と食料を供給する為に住み着いた，欧米人 5 人とハワイ人 15 人であった。その後，明治 9 年（1876）に日本が領有宣言をして，国際的にも小笠原は日本の領土として認められた。

図２　二見港のおがさわら丸

ここでの農業は，亜熱帯性気候を生かした果樹や冬野菜の栽培，漁業ではカツオ，マグロ漁のほか，捕鯨やサンゴ漁などが行われた。大正後期には人口 7,000 人を超え，小笠原の最盛期を迎える。しかし，太平洋戦争を境に，それまでの平和で美しい島の様子が大きく変わる。昭和 19 年（1944）には，6,886 人の島民が本土へ強制疎開させられ，硫黄島では日本軍が玉砕し，日米両国を合わせて 28,721 人の尊い命が奪われた。

戦後，小笠原は米軍の統治下に置かれ，一部の欧米系島民しか帰島を許されなかった。全ての島民たちの帰島が許されたのは，それから 23 年後の昭和 43 年（1968）6 月 26 日，小笠原諸島が日本に返還された時となる。

戦時中，小笠原の全島民が疎開し，戦後のアメリカ統治下でアメリカ人が定住し，日本に返還後もアメリカの文化が溶け込んだ形で融合した文化形成が行われている。戦後，復興から振興へと小笠原諸島の発展，開発が進んでいき，自然との調和をはかるなかで，どのように個人の経済活動と環境のバランスをとるかは，永遠の課題でもある。

図３は小笠原村の平成 12 年度から 25 年度までの人口推移である。この間で最小数は平成 17 年度の 2,352 名で，最大数は平成 25 年度の 2,575 名である。この間の増加率は約 9.4%で右肩上がりとなっている。この理由は移住者数が増加したことではないかと推測される。世界自然遺産登録され，小笠原の認知

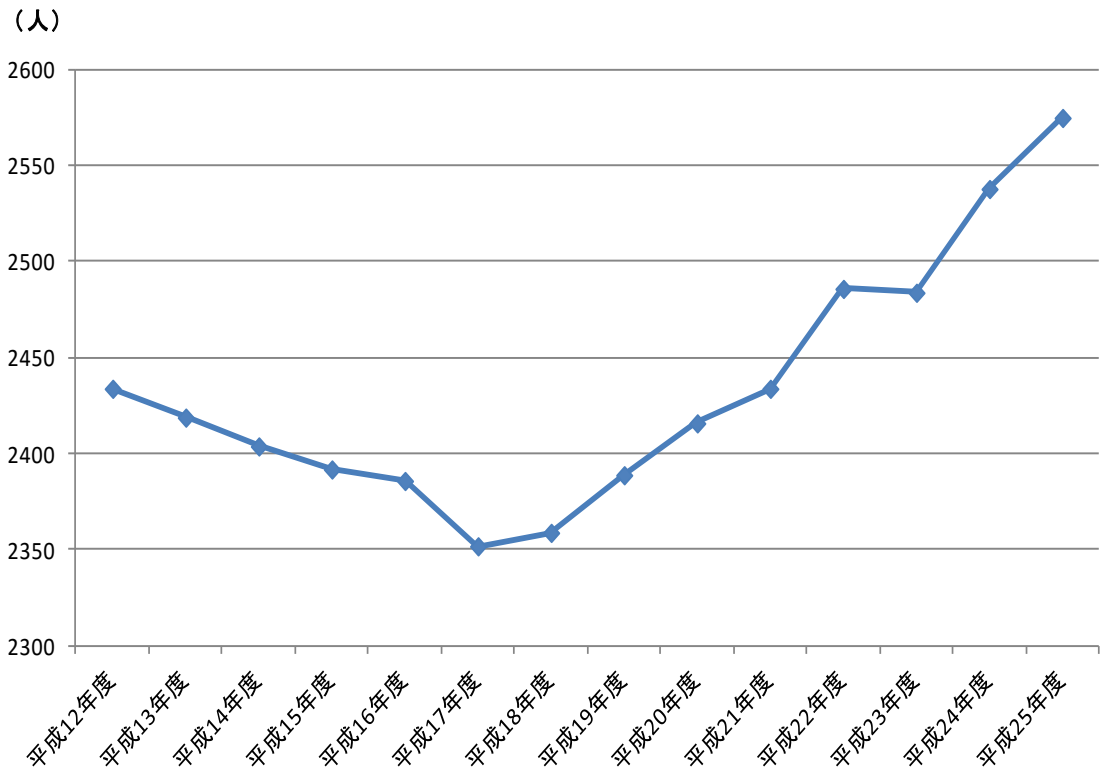

図3　小笠原村人口数

(小笠原自然情報センターHP小笠原世界自然遺産に関する基礎資料より筆者作成)

度が上がったことが一つの原因ではないかと考えられる。子供がいる世帯が増えているのが特徴である。おそらく今後もこれまでと同様微増傾向ではないかと思われる。

人口は増加しているが，生活環境としては恵まれているわけではない。ほとんどの生活必需品は本土からおがさわら丸で運ばれ，食糧自給率が高くないので，欠航すればそのあいだ食糧の補給も滞る可能性がある。そしてガソリン価格も本土の約 2 倍かかり，補助金があるといっても島民にとってはその負担はそう軽くはないだろう。

以上のように，小笠原の魅力が知れ渡ることで多くの人々が小笠原に興味をもってくれるのはこれまでの周知活動の結果ではあるが，移住者にとっては小笠原での生活はそう簡単ではなさそうである。ライフラインの複線化が必要と考えられる。

３．世界自然遺産登録前後の来島者数

観光客にとっては父島へ行くまでがかなりの負担であるが，だからこそ小笠原がその価値を高めてくれる要因の一つにもなっている。図 4 は昭和 53 年度から平成 26 年度までの来島者数の推移である。世界史以前遺産登録前の 2010 年(平成 22 年)度までの来島者数の平均は，24,432 人，登録後である 2011 年(平成 23 年)～2014 年(平成 26 年)度までは 32,975 人となり増加率は約 35%である。屋久島などと異なり，爆発的な環境客増加とならない要因はやはり交通手段がおがさわら丸のみであり，毎日就航していないことは大きいだろう。図 4 を見ると，登録した 2011 年(平成 23 年)は観光客が一気に増加しており，世界自然遺産ブームの恩恵であるといえる。ただ登録に向けて，積極的な周知・広報活動をしていたにもかかわらず，登録まで観光客数の増加が見られなかったことは，世界自然遺産登録時の情報量多さ，つまりマスメディアによる積極的な情報発信のほうが，受け手にとってより小笠原に興味を持ち，観光に訪れたいというインセンティブになりえると考えられる。

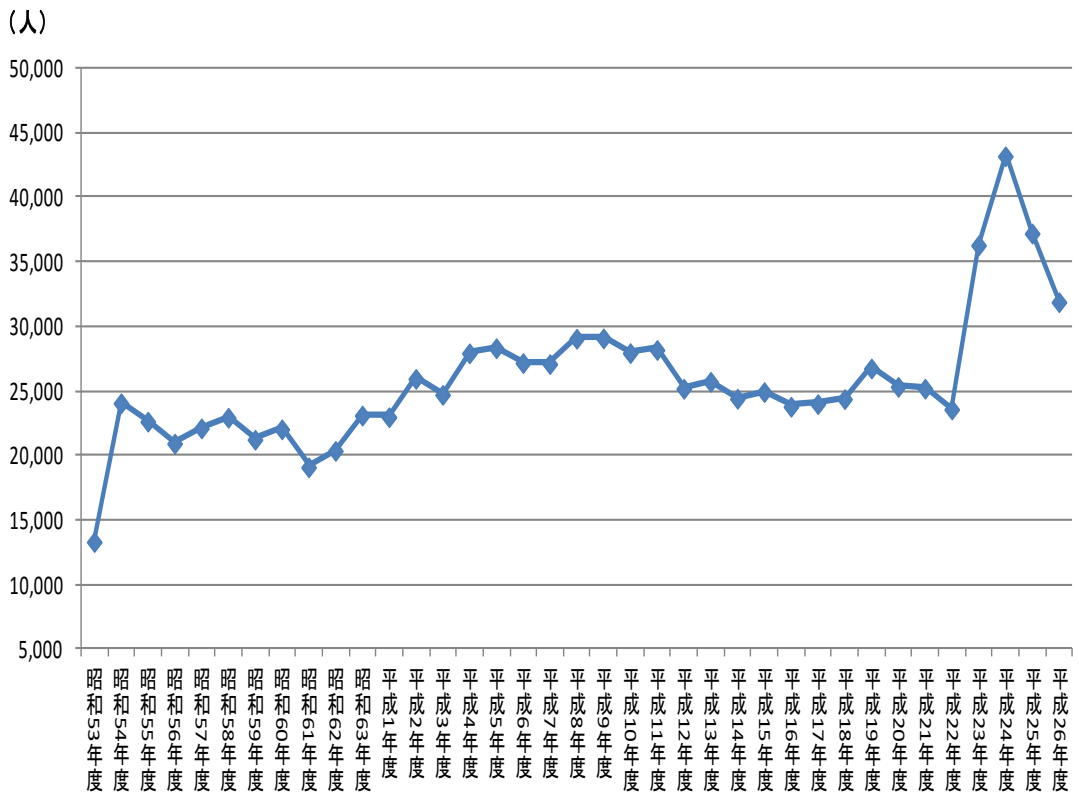

図4 小笠原諸島来島者数（小笠原村観光協会平成26年度統計資料より筆者作成）

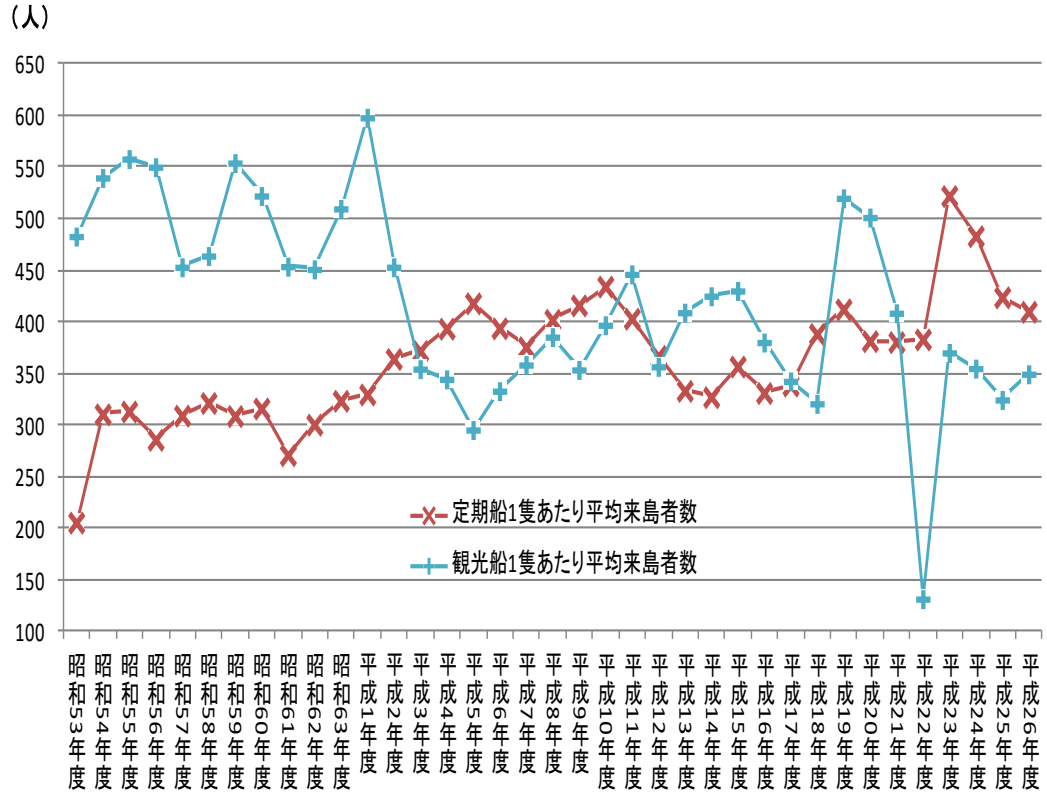

図5 一隻あたりの平均来島者数

（小笠原村観光協会平成26年度統計資料より筆者作成）

しかし 2012 年(平成 24 年) に来島者が最大になったあと，2013 年(平成 25 年)から減少傾向に移行している点は，今後の小笠原村がどのような村づくりを目指すか，に関わってくると理解される。登録前はコンスタントに来島者が 2.5 万人前後で維持できていたことを考えると，主要な産業である観光業としても登録後の急激な増加を予想通りの状況と受け止めるのだろうか。小笠原への観光客数については，その来島の手段としてのおがさわら丸と宿泊施設の収容能力に依存するため，極端な観光客数の増加は非実現的である。さらに島内での観光リソースが限定されている中で，来島者数に対してしっかり対応できない状況は，リピーターの可能性がなくなり，小笠原へのイメージが悪くなることも考えられる。屋久島では自然遺産登録後に急増した観光客が人気の縄文杉ツアーに殺到し，大渋滞が発生したことで多くの観光客にとって負のイメージを残したということがあった。先にも述べたが，小笠原の場合は来島者の上限が想定できるが，その上限の来島者に対して適切な観光資源を適切に提供できるわけではないだろう。次章で述べるが，小笠原のエコツアーでは，限られたガイド，ガイド一人当たりの引率数も決まっており，適切な数の来島者をしっかり考慮していく必要がある。観光業が大きな産業として維持していくためにも，現在の観光リソースに合わせた来島者数をしっかり考えるべきだと思われる。

図５は一隻当たりの来島者数であるが，定期船はおがさわら丸である。観光船は大型チャーター船である。これはおがさわら丸と比較すると収容人員が大きいが，おがさわら丸で来る観光客が島内で最低３泊するのに対し，宿泊が船内であったり，３泊未満であったりと村への貢献は大きくない。そして小笠原はツアーの一行程であるため，必ずしも小笠原を観光したいという層ではない。やはりおがさわら丸で来島する観光客層をしっかりターゲットとし，満足させることは，今後の小笠原の観光地としてのポジション維持には必要不可欠であると考えられる。

４．小笠原エコツーリズムの概要

小笠原ではホエールウォッチング(図６)が早い段階から実施されていた。これが小笠原でのエコツーリズムの発端である。また海津，真板（2004）によると，1989 年の小笠原ホエールウォッチング協会設立が，日本初のエコツーリズムの事例として捉えている。小笠原は東洋のガラパゴスと言われ，海洋島として周囲の環境に影響されず自然が形成されてきた歴史がある。また昔から島を訪れる，経由する人々はいたが，住民が定住したのも約 200 年前程度からであり，文化形成されてこなかったこともその要因だと考えられる。多

図６　三日月山展望台ウェザーステーションからのホエールウォッチング

表1 小笠原におけるガイドの形態

ガイド形態	ガイド一人当たりの引率人数	認可組織	認可の条件
ホエールウォッチング	任意	小笠原ホエールウォッチング協会	特別なし、しかし任意の講習会有
森林生態系保護地域	10名以内	小笠原エコツーリズム協議会	2年に1回、約4時間の講習
南島・石門	南島15人以内、石門5人以内	東京都	2年に1回

現地調査や小笠原村役場HPなどから筆者作成

図７　外部からの種子除去装置

くの在来種が存在し，来島者にとってはそれこそが小笠原に来て見る価値であり，船で 24 時間以上かけても来たいと思わせる要素だろう。鈴木，鈴木（2009）も言及するように，かかる費用と時間がフィルターになり，負担できるのはコアなツーリストであり，小笠原でしか体験できないエコツーリズムがあるほうが小笠原の優位性を明確にできるだろう。そのため，ホエールウォッチングだけでなく，陸域の森林生態系保護地域でのエコツアーや南島や石門を訪れるエコツアーが小笠原では存在している。

表１はそれらのエコツアーガイドの概要である。森林生態系保護地域をガイドするには 2 年に 1 回約 4 時間の講習会に参加しなければならない。南島・石門は 2 年に一度の申請が必要である。自然保護を前提にそれぞれのエコツアーが実施可能となる。そのため，あくまでも自然を破壊しない，環境維持，向上を実現するなかでエコツアーが実施される。そのため，南島では入島禁止期間があったり，ガイド一人当たりの引率人数に制限があったり，該当地域に入る前に事前説明や外部からの種子を除去する必要(図７)がある。これらはすべて小笠原の固有種を守ることに依拠する。小笠原にあるすべての動植物は３つの W（Wave(波による 16％)，Wing(翼による 68％)，Wind(風による 16％)）により運び込まれ，こうした自然状態による種の増加は，2300 年に 1 種という，誠に緩やかなペースですすみ，小笠原独人生態系を作り上げてきた（小林 2012)。

小笠原でエコツーリズムが進展してきた理由は，その独自の自然を体験したいという来島者に対してのサービス提供であるのは明白である。おもな産業が観光業であり，エコツアーに参加することを目的とした来島者に対し宿泊とセットで小笠原の文化を体験できるきることがその最大の価値であり，単に商業目的ではないと理解される。

他の地域のエコツアーと小笠原のものと異なる点は，島内の収容数に限界があるため，やみくもにエコツアーを増やせない点である。エコツアーが人気になり，島外のガイド希望者があふれかえり，エコツアーの数が多数供給されても，これまで述べてきたように来島できる人数には限界がある。そうであれば，やみくもにガイド希望者を受けいれることもできないのが他の地域に対する小笠原の現実である。そのため，世界自然遺産登録の 2011 年を迎えるにあたり，小笠原の観光関係業者やエコツアーガイドのなかでは，外部からの新規エコツアーガイドの増加が懸念された。その理由は，1993 年に屋久島が世界自然遺産登録され，多くの観光客が来島した。その際，島内のツアーガイドではなく，島外から同伴するエコツアーガイドが増加したと言われる。屋久島はその象徴である縄文杉は当然であるが，それ以外にも観光客が来島する目的の場所が存在している。九州内でもっとも標高が高い宮之浦岳など，世界自然遺産登録以前より多くの登山客にとっては魅力的な訪問地であった。そして登録により一般の観光客にもその地と理解されるようになった。屋久島への来島の手段は鹿児島空港から約 45 分の航空機だけでなく，フェリーと高速船がある。

そのため，縄文杉を目指さない観光客にとっては手軽に訪問できる世界自然遺産の対象になったと考えられる。それとともに観光業界として一度は行ってみたいと思うライトユーザーとしての観光客に随行するガイドを，島外のツアーガイドが担った。島内のガイドにとっては自分たちの仕事が取られるため，小笠原でも同様のことが起きることが危惧された。しかし，そのようなことは起きなかったようだ。おそらく考えられる理由としては，小笠原独自の生態系を説明するにはそれなりの知識がいること，そのためにガイドの講習会を要求されるなどがあるだろう。しかしもっとも最大の理由はフェリーで来島者数が限定されるなかで，片道 25 時間半も要する環境のもと，観光業界にとってはビジネスとしての魅力がそう感じられなかったのではないだろうか。外部のエコツアーガイドが入り込む余地はなかったと考えられる。

図８　生態系保護地域への入り口

小笠原の例で言えることは，登録前にすでに屋久島，白神，知床が登録され，観光業に関する事例を学習できた点をしっかり反映させたことだろう。特に，いい点はもちろん，悪い点については同じことを繰り返さないよう，しっかりエコツアーガイドについて環境整備したことだろう。世界自然遺産登録では長男格である屋久島と白神，次男格の知床に対し，末子である小笠原は，登録による一過性のブームについてその内容を理解したうえで，準備できたことは間違いないだろう。それ以上に小笠原村では先行の地域へ訪問し，調査しただけでなく，小笠原に各地の関係者を呼ぶなど，積極的な情報収集を行ったことも対応として評価できるだろう。鈴木，鈴木（2009）は，屋久島での環境保全への貢献や資源利用の規則は，ガイド事業の運営に対して負担をかけたことからもその実現は容易ではなく，予めそれらを見越した対策を取っておくことは，必要な手続きであろう，と指摘する。屋久島での多くの観光客により，環境保護と整備をどのようにしていくべきか，それを自治体が行うのか，観光業者が行うのか，先行者の失敗事例を参考にした点は非常に大きかっただろう。ただ来島者が減少している状況は改善策を考えなければならない。

５．これから要求されるエコツアー，ガイドへの要因

世界自然遺産登録後も小笠原側で考えられていた登録に対するネガティブな要因はそう明確になることはなかった。来島者に関しても図 4 を見る限り，平成 28 年度も昨年度比減少になると思われる。しかし登録前の 2 万 5 千人を下ることがなければ，小笠原側としては問題ないだろう。もともと島としてのキャパの問題があるため，島に余計な波風を立てないためにもそれくらいで落ち着くのが理想かもしれない。ただ島内の想定と島外のそれは異なる。来島者が減少しているという情報は小笠原にとってネガティブなイメージとなるだろう。知床でも観光客は減少している。世界自然遺産登録で多くのメディアに取り上げられることで，日本全国でその認知度が高まり，観光客が増加するのは世界遺産地域では同じ現象だろう。しかし新たに登録された地域が出てくれば，それ以前の地域の情報が減少し，その地域に対する一般の人々の興味

も薄れるだろう。世界遺産の登録地域の一つになることなく,その魅力をしっかり発信し,観光客が訪問したいという，他地域との差別化をはからなければならない。小林(2012)が「観光客の満足度を最大化させるためには,どのようなサービスや商品が必要なのか。こうした事柄をはっきり理解,認識したうえで,方向性を決め，村の人たちや関係者が協力して，エコツーリズムによる観光立村への努力を継続しなくてはならない。」と述べるよう,小笠原でいえば自身がもつリソースを明確にし，そこに関わる人々がその価値をしっかり守り，発展させる必要があるだろう。エコツーリズムの役割は坂井（2008）によると「自然環境や歴史文化を対象として，それらを体験し，学ぶとともに対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のあり方を示している。その効果は環境保全，観光振興や地域振興である。」と述べている。それを実行できる役割をもつのはエコツアーガイドではないだろうか。武，斎藤（2011）の研究によるとエコツアーガイドの役割として，全体で「顧客サービス」と「環境保全」が多いのに対し，「地域振興」が少ないという。それはビジネスとしてエコツアーを捉えてしまうと地域振興の役割が弱くなってしまうのだろうが，そこをしっかり意識することで，小笠原の価値向上も可能にすると思われる。渡辺他(2008)もこの点について,「自然ガイドの案内と解説によって，観光客が 1 人で見るだけでは知りえないことに気づかせ,驚かせる。または，地元居住者であるからこそ案内が可能な場所，季節・時間帯に観光客を連れていく。このような人的なサービスによって，資源に観光経済価値を付加させることができるようにする。」と述べ，エコツアーガイドは単に小笠原の自然について説明するだけの役割ではない。小笠原への興味を来る前以上に高めるようにし，観光客がリピーターになるよう教育する側面も必要だと思われる。そのためにもエコツーリズムには環境保全の役割はもちろんだが，地域振興としてより魅力的な

表2　小笠原固有種一覧

哺乳類	オガサワラオオクモリ
鳥類	ハハジマメグロ アカガシラカラスバト オガサワラノスリ シマハヤブサ オガサワラカワラヒワ アホウドリ
昆虫類	オガサワラシジミ オガサワラトンボ オガサワラアオイトトンボ ハナダカトンボ オガサワラハンミョウ
植物	ヒメタニワタリ コヘラナレン ムニンツツジ シマカコソウ ムニンノボタン アサヒエビネ ホシツルラン シマホザキラン タイヨウフウトウカズラ コバトベラ ウチダシクロキ ウラジロコムラサキ

（出典：小笠原ガイドブック平成23年度版）

図９　小笠原に多く生息するマルハチノキ

小笠原の可能性を切り開く役割が求められる。

表２は小笠原ガイドブック平成 23 年度版より作成した，小笠原における固有種の一覧である。このなかにいくつかの絶滅の危機の瀕した種があり，それを保護する活動が実施されてきた。小笠原に人が住むようになり，家畜を島外から連れてきたり，戦後の混乱期に外来種が繁殖し，固有種に大きな影響を与えた。図９は，小笠原に多く生息するマルハチノキである。これは小笠原以外でも生息するが，島のいたるところで見ることができ，ガイドも必ず紹介する代表的な植物である。

筆者が訪問し，ガイドによって森林生態系保護地域（アカガシラカラスバトのサンクチュアリ）を案内してもらった際にも，20 年前にほとんど見ることができなくなったが，サンクチュアリ(図８はその入り口)をつくり，外来の野ネコや野ヤギに捕食されないような環境をつくることで，現在ではまれにではあるが住宅地でも観察されることがあるそうだ。他の固有種についても，外来種から隔離することで，個体数を増やす活動がされている。父島だけでなく他の島でも,外来種を駆除し，小笠原本来の生態系を実現できるよう取組みが行われている。

このような活動は称賛されるものであり，これからも小笠原の価値を保護する一環としてエコツアーで取組みを紹介することは環境保護に敏感な来島者には非常に有用であるだろう。しかしすべての来島者がそうであるとは限らない。今回エコツアーガイドによって説明された内容は価値の高いものであるのは間違いないが，さらにプラスアルファの価値を提供できる要素が必要ではないか。例えば島民にとってこのようなサンクチュアリがどのような役割を担って，島民ならびに島全体でどういう方向を目指すのか，などを説明することが必要ではないか。小林（2012）によると，「観光地としての小笠原を考えうとき，重要なポイントは３つある。まずは交通手段，片道 25 時間半の船便について。2 番目は宿泊施設 3 番目が滞在中の観光諸活動（あるいは時間の過ごし方）についてである。」と述べている。最後の本論文の締めとして，小林(2012)で挙げられた 3 つの要因からみる，小笠原の付加価値を高める可能性について述べる。

６．小笠原のこれからの展望，可能性

小笠原が独自の文化を持ち，来る多くの人々がその価値を認識することに異論はない。同じ東京都であっても 23 区内での住環境，自然環境とはまったく異なる。同じ南の温暖な観光地へと考えると，沖縄本島のほうが移動時間も短く，1 日に複数便あり，長期休暇の対象地となるだろう。現在では，宮古島や石垣島へも羽田空港から直行便があるので，これらを選択する可能性も高い。その理由は片道 25 時間半もかかる移動時間である。さらに船での移動であり，天候が悪く海が荒れれば，乗り心地は極端に悪くなる。平成 28 年７月に新しい船に代わり，片道 24 時間と改善されるとしても，船酔いしやすい人はもちろんのこと，そうでなくても長時間の船内拘束は来島者を不快にさせるだろう。もしくはそれが原因で，1 回きり，もしくは行かないという人もいるだろう。この点に関しては，筆者が経験した点においても，行きの船ではほとんど揺れることなく，多くの人にとっては快適であったようだが，船のなかで閉じ込められることは必ずしも気分は良くない。また帰りの便は八丈島あたりまでかなり揺れ，かなりの不快感であった。行きの船内では小笠原の案内等のリクリエーションが行われたが,船の揺れは避けられない類のものなので，船内で飽きさせないイベントはさらに必要だろう。

宿泊施設に関しては，おそらくこれ以上増加することはないだろう。来島者が平成 24 年を境に減少していることもあり，現状を維持することは，小笠原の観光業を維持することからも必要だろう。小笠原の価値を高めるために宿泊施設の役割も大きいと思われる。なぜなら多くの来島者が小笠原を訪れると３泊する。おそらくおなじ宿泊施設で。滞在中

に過ごす時間は小笠原滞在中でもっとも長い時間になるかもしれない。そうなると小笠原の印象を左右する存在となりうる。そのためにも，宿泊施設が来島者へ小笠原の魅力を伝える役割を果たす必要がある。そのほかの理由では，宿泊施設を経営する人々は，島で生活する住民でもあり，小笠原について情報発信する主体となりうる。その情報により，詳細な小笠原の情報を知ることができ，それは来島者にとってかけがいのない小笠原での思い出にもなりうる。

最後の小笠原での過ごし方であるが，上記で述べたように，小笠原には３泊滞在することになる。それだけの間に，来島者が満足するアクティビティが存在するかどうかは，リピーターになるきっかけにもつながるだろう。現状はそこまでのものはないだろう。どちらかというと時間をもてあますだろう。もちろんその充実も目指すべきであるが，小笠原がもつリソースの限界を考えると，簡単に増やすということは難しいと思われる。そこで筆者が経験した例を挙げたいと思う。昼食をとろうと思い，立ち寄った飲食店でウミガメの刺身(図 10)とタマゴ(図 11)を紹介された際のことである。ウミガメを食べる習慣があると知ったのは，島寿司の文化を知ったからであるが，タマゴまで食べることはこの時に知った。鹿児島ではいろいろなところでウミガメが産卵することが知られているが，ウミガメを食用として扱っていたのはかなり昔のことである。屋久島の人々から貴重なタンパク源として，小さい頃そのタマゴも食べていたとは聞いていたが，実際に現在の日本でもウミガメが食べられるとは想像していなかった。この飲食店でウミガメの肉やタマゴを食べることを知り，その後訪れた小笠原海洋センターで，年間 130 頭食用に捕獲され，島内で消費されているとのことであった。ウミガメが食用で捕獲されていることを飲食店で聞かなければ，おそらく海洋センターでウミガメのことについて聞かなかったかもしれない。

このようにウミガメの消費を知ったことで，

図 10　ウミガメの刺身

図 11　ウミガメのタマゴ

ウミガメの捕獲についても興味を持った。島民にとって生活に密接にかかわることであっても，おそらく島民にとってはあくまで当然の情報であり，何ら特別ではない。それがわれわれ来島者にとっては，とても貴重な情報であり，これが小笠原独自の文化でもある。

島民にとってはたいしたことのない情報であっても，来島者にとっては目新しい情報であり，来島者にとってこれこそが小笠原の価値になる。これは宿泊施設に対しても同じである。来島者にとって価値をつくることは，役場の人間がするものでもなく，島全体で実施すべきことである。それにより観光地として持続可能性を実現できるだろう。より小笠原の価値向上，持続可能な環境保全を実現した観光地へつながるだろう。

本研究は，平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(分担)「島嶼地域の世界自然遺産登録の経験と遺産概念の再考」，課題番号 15K01949）による研究成果の一部である。

参考文献

小笠原村役場 HP(http://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/)
小笠原村観光協会 HP(http://www.ogasawaramura.com/)
小笠原村諸島世界自然遺産パンフレット，小笠原村産業観光課
小笠原自然情報センターHP(http://ogasawara-info.jp/)
海津ゆりえ，真板昭夫（2004）第二世代を迎えた日本型エコツーリズムの課題と展望に関する研究，西山徳明編『文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』*国立民族博物館調査報告*，Vol.51，pp.211-227
環境省関東地方環境事務所(2014)『小笠原諸島世界自然遺産』環境省関東地方環境事務所
小林天心（2012）世界自然遺産・小笠原諸島のあるべき観光振興　―エコツーリズム・マネジメントの中心とする諸提案―，*ホスピタリティ・マネジメント*，亜細亜大学，Vol.3 No.1，pp.1-22
国土交通省 HP『小笠原諸島におけるエコツーリズム事業について』(http://www.mlit.go.　jp/crd/chitok/)
坂井宏光（2008）日本の世界遺産における環境保全型観光産業の発展と課題　―屋久島の世界自然遺産を中心として―, *教養研究*, 九州国際大学，第 15 巻，第 1 号，pp.63-79
自然公園財団(2011)『パークガイド「小笠原」』一般財団法人自然公園財団
鈴木晃志郎，鈴木亮（2009）世界遺産登録に向けた小笠原の自然環境の現状，*小笠原研究年報*，首都大学東京，第 32 号，pp.27-47
武正憲，　斎藤馨（2011）文献によるエコツーリズムにおけるガイドの役割と環境保全との関係把握，*ランドスケープ研究*，日本造園学会，Vol.74，No.5，pp.531-536
渡辺悌二，　海津ゆりえ，　可知直毅，　寺崎竜雄，　野口健，吉田正人（2008）観光の視点からみた世界自然遺産，*地球環境*，一般社団法人国際環境研究協会, Vol.13, No.1, pp.123-132